

伝え

発行 日本口承文芸学会
 〒192-03 東京都八王子市南大沢1-1
 東京都立大学 中国文学研究室気付
 ☎ 0426-77-2145 FAX. 0426-77-2150

先達の言葉

宮田 登

昭和35年5月13日、房総民俗会の席上で、柳田国男が行った講演は、「日本民俗学の頹廃を悲しむ」というタイトルで知られながら、なかなかその内容を知ることができないままであった。ところが、約二年前に、菱田忠義氏による当時の話のメモが公開されて、いろいろと取沙汰されたことは記憶に新しい。のちに『伊那民俗研究』第3号にそのメモが全文掲載され、じっくりと読む機会が得られた。柳田は託宣めいたことをいろいろと話しているが、印象に残ったのは、フォークロアというのは普通人の知識で、昔者のもっている知恵であり、日本の場合、東京の周辺でも分かるという。柳田の念頭には、イギリスにおこった民俗学が、産業革命ですっかり衰退していることがあり、それと比較して、日本のフォークロアはまだ地域に生きていることを前提として日本の民俗研究が成立することを力説している。ただ現代の当面する課題とくに政策面についても発言できるものでなくてはならないとする。「学問は国のためにならねば、する必要はないと思う」とまで

言い切っており、叱咤(した)し、鼓舞するのである。それも地方に在住する民俗学者に対する期待が大きかった。「地方にある雑誌は50人か30人のみで読んでいるが、珍本になるのみでなく、もっと広く、東北の人と九州の人にきいて疑いを送って見たまえ」という。

最近、都丸十九一氏の『一通の手紙』を拝読して、宮本常一氏との対談記事が興味深かった。宮本氏は民俗学の欠点が、各地に活動する地方の学者を発掘していかなかったことにあると指摘している。現地の方法論を重んじるべきで、東京の方法論に依存しない方がよいという。むしろ地域にあって方法や理論を打ち出すべきだと主張するのである。「日本の民俗学の欠点は、事実をおさえても背景が不足ということですよ」とズバリのべている。

先達は耳の痛い言葉を残して去ったが、現代社会は余りにも眼まぐるしく、我々は目先の情景に心奪われ、遠くの動かぬ風景に眼をやる余裕を失ってしまった。(埼玉県)

1994年度大会の開催について

今年の大会は、金沢市で開催されます。その内容については委員会や担当委員の間で検討中ですが日時と場所は下記のとおりです。今からスケジュールを調整していただき、ぜひともご参加下さい。

記

【日時】 1994年6月4日(土曜日)・5日(日曜日) (4日は、午後から開会の予定)

【場所】 金沢工業大学(藤島秀隆氏のご尽力によるものです)

【その他】 詳細な日程表や大会の内容・宿泊施設などについては、後日、事務局より案内を送付いたします。なお、現地研究は予定されていませんので、各自で見学などをお考え下さい。

現在、大会での研究発表の希望者を募っています。別紙をご参照の上、積極的にお申し込み下さい。

＜仲間たち＞ 奄美民話の会

田畑 千秋

奄美民話の会が誕生して満二年になる。会員は主婦や保母、公務員などいろいろで、三十数人、全く民話に縁のなかった人々もいる。しかし、昨年6月には、皆で力をあわせて、機関誌『奄美の民話』を創刊した。論文、探訪報告、伝説特集、ケンムン話（奄美の代表的妖怪譚）特集、奄美の民話紹介（会員の再話で）、創作童話、座談会（『保育と民話』保母さん達の座談会）等々で、二百頁を越すぶあつい冊子になってしまった。今、第二号を編集中である。近く皆様にもお届けできると思っている。せんえつではあったが、私はその創刊号の巻頭の発刊の辞を次のように書いた。私達の思いを簡単にまとめたつもりである。

ここに奄美民話の会誌『奄美の民話』を創刊します。奄美には祖々（おおぢ）の世から連綿と語りつがれてきた豊かな伝承がありますが、最近この伝承の数々が根こそぎ次代へ継承されなくなるのではという危惧がでてきました。もちろんこのような危惧は、十年前にも、二十年前にも論じ合われたので、今さらと思うかも知れません。しかし、今さらと思えるような現況だからこそ、少しでもそれに抗してみたいのです。ただ抗すといっても、たんに保存だけを考えているわけではありません。奄美の言葉自体がものすごい勢いで変化していますし、生活環境の変化も筆舌に尽せません。私達奄美民話の会は、奄美民話の新しい展開を願っています。その展開の中に、人々の心を包含させたいのです。私達の合い言葉は、「民話をとおして豊かな心を！」です。そして名刺には、「奄美の心（民話）を次代に」、子供達に語り聞かせを！ 子供達に手作り絵本を！ 子供達に手作り紙芝居を！ 子供達に手作りパネルシアターを！ 子供達に手作り劇を！ と書きました。

思えば、昭和初期の日本民俗学の草創期、まだ民俗学徒達が、学問としての市民権を得ていない時、いちちやく『旅と伝説』を創刊し、民俗学徒達に発表の場を与えたのは、奄美大島出身の萩原正徳であった。また、やはりその頃、いちちやく柳田國男に師事し、昔話の採集にあたったのは、喜界島出身の岩倉市郎である。岩倉はテープレコーダなどという機器のなかった時に速記術を駆使して多くの不朽の名著をものした。奄美でいえば、『喜界島昔話集』『沖永良部島昔話』等々である。そういった先覚者を輩した奄美であり、濃密な伝承のあった地域である。島の伝承をもう一度よみがえらせたいと思っている。

私達の活動は、村々への探訪はもちろん、保育所等での語り聞かせ、紙芝居製作、パネルシアター作り、奄美の民話の再話、童話創作などである。また、あまみ民話絵本『マガンとさる』も昨年出版した。これは全二十巻シリーズの第一巻目である。また会員の嘉原カヨリさんを中心に、奄美諸島のわらべ歌がぞくぞく採集されていることも成果の一つである。今後の御指導をよろしく願う次第である。（鹿児島県）

＜外国通信＞

ナショナル・ストーリーテリング・

フェスティバル参加の記

櫻井 美紀

毎年、10月の第1金曜日から日曜にかけて、アメリカのテネシー州のジョーンズボロで「ナショナル・ストーリーテリング・フェスティバル」が開かれている。私は1993年10月1日から3日間、語りのグループ9名とともに、この祭りに参加した。

小型のプロペラ機に乗り継ぎ、アパラチア山脈を越え、着いた所が、緑の丘と谷に囲まれた小さな町、ジョーンズボロだった。人口3000人程の、村といった方がいいような美しい町で、1973年に町興しの企画として、このフェスティバルが始まったという。主催団体は“National Association for the Preservation and Perpetuation of Storytelling”である。

これはプロのストーリーテラーによる巧みな語りを、心から楽しむ祭りで、今年の祭りに招待されて語ったストーリーテラーは31人と1グループ、聴衆はアメリカ全土から集まった7500人であった。丘の上や林の中に、千人収納のテントが五つ張られ、それがストーリーテリングの場である。聞き手は、壇上で語るストーリーテラーの話を、スピーカーを通して聞く。語りにつられて、千人の聞き手がよく笑うが、その大爆笑には圧倒された。「語り、聞く」楽しみを共有する様子に、語りの活動の本質を改めて実感した。

昔話、創作の話、経験談、ほら話などが語られるが、中に、資料集で読むことのできる各国のおなじみの昔話が、アメリカの風土の中で、語り手の手で変容され、語り手それぞれの個性が加わって語られるのを聞き取ることができた。

私たちのチームは図書館員と語り手たちの会のメンバー（本学会の理事でもある大島廣志氏も含む）であったが、祭りのグラウンドで全員でわらべ唄と手遊びを披露し、佐藤涼子さん（品川区・図書館長）が紙芝居を、私が日本の昔話「頭に柿の木」を語った。これは土地のテレビと新聞で報道され、多少の話題を提供した。日本でも1992年から「全日本・語りの祭り」を実行しているので、私はその担当者として挨拶し、今後の日米の「語りの祭り」の交流を約束して来た。（東京都）

【投稿】『伝え』前号に、「大会報告」と題して、池田香代子氏と重信幸彦氏の大会に参加しての「感想など」を掲載しましたが、その重信氏「『目をつぶって、エイヤッ!』——大会参加記——」に対して、福田晃氏から反論の文章が寄せられました。「感想」をお願いしながら「大会報告」というタイトルを付した点をお詫びするとともに、今後、昔話の比較研究についての議論が活発になることを期待して福田氏の投稿を掲載します。ご意見などお寄せ下さい。(『伝え』編集部)

重信幸彦氏の「大会参加記」を読んで

福田 晃

『伝え』13号に載る重信幸彦氏の「大会参加記」を読み、こういう「大会報告」もあるのかな、といささか驚き、また大会・シンポジウムに参加されなかった方々のことを思うと、小生の人格権ともかかわるゆえ、あえて一筆させていただくこととした。

まず重信氏の参加記の「目をつぶって、エイヤッ!」というセンセショナルな題名は、小生の発言の言葉尻を切り取って掲げたもので、これはアジテーターがよくやる方法だ。文中で同氏は、小生の発言を、「こうした資料化の問題に関して」「エイヤッ!と越えて先に進まねばならない、と言い放った」と書いている。しかし、この発言は、いみじくも池田香代子氏が、同じ大会報告に、「一方でえいやっとやる必要、とおっしゃった」と記している。この池田氏の「一方で」を添えると、重信氏の「と言い放った」という表現は、文脈上は成り立たなくなる。

外国・異民族の文化研究に携わる研究者の多くは、その言語の奥に秘められた、それぞれの民族文化の奥深さにたじろぎ、その比較研究の容易ならぬことを実感されているように思う。ほんの二、三度、韓国・中国において、昔話のフィールドめいたことを体験した小生でさえもそうであった。たとえば、十二億の人口を擁する中国における民間故事の伝承は、きわめて多様であると同時に、はかり知れないほどの豊かさを保有している。それを日本人であるわれわれが把握できるものは、ごく一握りでしかあり得ない。しかも、政治上の事情があって、高木史人氏が求められる厳密な伝承資料を手にするのは、絶望的でさえある。

それならば、比較研究は全く不可能なのか。重信氏はいみじくも、「異文化を語る言葉が政治性をはらんでしまう」「それを欠いた比較など脳天気の誹りは免れない」と書く。それぞれの民族文化やその研究が、その政治と深くかかわりつつ存在することは、当然のことである。その意味で、今さらめて、これをとりあげ、「脳天気の誹りは免れない」とする発言は、そのまま重信氏にお返ししたい。われわれは、その民族の枠を越え、政治性を越えて、その比較研究はどこまで可能か、それが今回のシンポジウムの課題であったはずだ。それが飯倉照平氏の提案で、「炭焼長者譚を例として」と題されたのは、そのシンポジウムが「炭焼長者」という一話型をとりあげることで、抽象的議論を越えようとする試みと理解し、その適任とは自認できないが、あえて課題に対する報告を引き受けたのである。

話型論ならば比較は可能であろう。それが小生の立場である。それを重信氏は、「ただおはなしを較べたいという欲求のみが露呈した」と言われる。この「ただ……のみ」というもの言いがくせものだ。それならば、重信氏のこれまでの論文に、「ただそれのみだ」を付けてお返ししよう。

ともかく議論の時間が少な過ぎた。会場で重信氏の発言があれば、こんな言葉尻をとらえた議論はしなくてすんだはずである。十一月の上旬、小生は招かれてカリフォルニア大学の研究集会に参加した。そこでの質疑・討論は、まことにさわやかであった。シンポジウムを開催するならば、報告者には二時間、討論には最低三時間ほど用意すべきであろう。各自に「不満が残った」ままのシンポジウムでは不毛の誹りは免れまい。(大阪府)

研究例会報告

<日常の「はなし」の近代>というテーマによるシンポジウムが、本年度第1回研究例会として、1993年10月16日、法政大学大学院棟で開催され、部屋に入りきれない程の参加者を迎えて、興味深い報告と討論が行われました。その内容を、川森博司氏にまとめていただきました。

シンポジウム：日常の「はなし」の近代 報告

川森 博司

まず、司会の重信幸彦氏から、都市の世間話、都市伝説、うわさなど、民俗学ならびに口承文芸の領域で最近注目を集めているトピックに対する状況の認識と、このシンポジウムの趣旨が述べられた。都市生活における不安および抑圧感を言葉によって解消していく仕掛けが「都市の世間話」や「都市伝説」であり、これらは従来の口頭伝承研究が明らかにしてきた「型」をふまえて成り立っているというのが、これまでの一般的

な理解のストーリーであった。このような理解の仕方には、さまざまな言葉が錯綜する状況としての「場」に対する理解が欠けている。いわゆる話し手と聞き手の日常にマスメディアの言葉が密接に入り込んできているのが、近代における「はなし」の「場」のあり方である。そこにおいては、メディアの言葉がどのように受けとられ、また作り変えられていくのか、つまり「受け手」の問題を浮上させなければならない。

このような趣旨に沿って、4人のパネリストの問題提起と討論が続いた。山本節氏は、パリを舞台にした「消えた新妻」の伝承の考察をおこない、これらの伝承は、日本古来の神話的シナリオが加工されたものであり、異国の都市と外国人に対する日本人の両義的な気持ちを反映したものである、と述べた。佐藤健二氏は、太平洋戦争時下における「赤飯にラッキョウを食べたら爆弾に当たらない」という「うわさ話」をとりあげ、都市的状况における情報の断片化がそのリアリティを支えていたのではないかと、という問題提起をおこなった。川村邦光氏は、1930年代における東京音頭の流行ならびに神々の出陣の伝承をめぐって、全国的に均質で大衆的な空間の中で生成する「話」のあり方を、当時の月刊誌の記事などを素材に論じた。関一敏氏は、1910年代初頭における念写という超能力をめぐる新聞記事の展開を追いながら、植民地、南極探検、無意識の発見など、時代相としての「経験の拡大」が、学者を巻き込んだ騒動を生み出したのではないかと論じた。

全体として、新聞等のメディアの情報がどのように受けとられ、どのように再生産されていくのか、という「受け手」の問題に迫る手掛かりが具体的につかめないもどかしさが残ったが、メディアの言葉の受容とその再生産の様相をとらえていくことが、今後の世間話や都市伝説研究の核となる部分であることを浮き彫りにする成果を示した。
(千葉県)

----- 事務局報告 -----

----- 受贈書リスト -----

神奈川大学日本常民文化研究所要覧 1993	歴史と民俗 神奈川大学日本常民文化研究所論集 10
国文学研究資料館平成4年度共同研究報告書 93-6	平凡社 93-8
日本民話の会通信 108~110号 同会 93-7~93-11	シベリア民俗玩具の謎 アリナ・チャダエヴァ著/斎藤君子訳
日本学術会議月報 34巻7号~11号 93-7~93-11	恒文社 93-9
民具マンスリー 26巻4号~8号 神奈川大学日本常民文化研究所 93-7~93-11	中国民話集 飯倉照平編訳 岩波文庫 93-9
神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 17集 漁民の活動とその習俗 I 平凡社 93-7	真澄遊覧記研究通信 創刊号 同研究会 93-10
近松研究所紀要 4号 園田学園女子大学近松研究所 93-7	城陽の民話と暮らし 城陽市教育委員会 93-10
フランス民話集 新倉朗子編訳 岩波文庫 93-8	国際日本文学研究集會會議録(第16回) 国文学研究資料館 93-10
奈良県立民俗博物館だより 20巻1号 93-8	日本民俗学 196号 日本民俗学会 93-10
	国立歴史民俗博物館研究報告集 52,53集 93-11

* 納がとうございました。今後とも御協力下さい。

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。 入会金 1,000円、年会費 4,000円。

入会申込書請求先： ☎192-03 東京都八王子市南大沢1-1 東京都立大学 中国文学研究室気付
日本口承文芸学会事務局 (☎0426-77-2145助手室 FAX.0426-77-2150)

送金先：〔郵便振替〕東京8-044834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan,

c/o Department of Chinese Language and Literature, Tokyo Metropolitan University,
Minami-Ohsawa 1-1, Hachioji-Shi, Tokyo, ☎192-03, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください

☆比較論に限らず、会員の方々の積極的な投稿をお待ち致しております。(編集担当; 大島・中村・三浦)